［音　楽］

児童の表現意欲を高める音楽づくりを目指して

－３年生「まつりの音楽をつくろう」の実践を通して－

齋藤　恵美*

１　主題設定の理由

担任する３年生の児童は，歌やリズム遊びが大好きである。ところが，音楽の授業については好きかどうかと尋ねると「好き」と答える児童は半数で，あとの半数の児童は「好きなときもあるけれど・・・。」「好きじゃない。」と答える。様子を見ると，鍵盤ハーモニカやリコーダー等，楽器を持つ場面になると音符を読むのに時間がかかったり，自分の思うような音が出せなくてつまずき，表情が沈んでいる児童がいる。

３年生に進級し，リコーダーを初めて手に取った児童はみな，うれしそうであった。初めて学習するリコーダーに進級の喜びを重ね，休み時間にもケースからリコーダーを出して音を出す姿もあった。だが，学習を進めて簡単な曲を演奏する段階になると，音符を読むのに時間がかかったり，指が思ったとおりに動かせなかったりして，リコーダーを演奏することが楽しい時間ではなくなってくる児童が出てきた。

読めなかった音符がだんだん読めるようになってきたり，指が少しずつ動かせるようになってきたりして，演奏できなかった曲が自信をもって演奏できるようになり，音楽が楽しくなったり好きになったりする児童もいるであろう。実際，楽譜を読み，できるようになるまで粘り強く練習しなければ演奏はできるようにならない。また，演奏できるようになるまで努力したからこそ，自分の思ったとおりに演奏できた喜びは大きいものである。だが，せっかく歌やリズム遊びを楽しみ，「音楽が好き。」「音楽が楽しい。」という気持ちを育んできたのに，「楽譜が読めない。読むまで時間がかかる。」「指が上手に動かせない。」などの理由で音楽表現への意欲や自信を失い，全ての音楽活動への苦手意識を持ってしまうのは残念なことである。

担任している３年生の児童が思い描いている音楽の学習は，「歌，鍵盤ハーモニカやリコーダー，その他の西洋楽器で，音符を読んで楽譜通りに演奏するもの」というイメージがあった。こうした児童のイメージを超えるために，私は一つの方策を立てることにした。音楽の仕組みをしっかり教え，手がかりにしながら自分の表現したい音楽をつくり，自信をもって演奏し，充実感を味わうことができれば，子どもは今までとは違う満足感を味わえるのではないか。そして，音楽の楽しさを感じ，音楽表現への意欲もさらに高まるのではないかと考えた。

３年生の音楽では，「まつりの音楽をつくろう」という題材がある。その題材の学習を通し，和太鼓を中心とする和楽器を使って「まつりの音楽」をつくる。リズム遊びが大好きな児童は，自分の思い通りの音楽を作り，思い切り表現を楽しめるのではないかと考える。また，和楽器には西洋音楽のような五線譜はない。耳で聞き，リズムや旋律を口ずさみ，音楽を体に取り入れていくのである。児童の苦手とする音符はないが，ないからこそ音楽をつくっていくのは大変な作業でもある。五線譜や音符で構成される，西洋音楽の楽譜という形が存在する意味も考えさせながら，リズムや拍を感じ取る力を育て，児童の表現意欲を高めたいと考えた。

日本の音楽は，音楽科の学習で今後ますます重要視されていくことをも踏まえ，本主題を設定した。

２　研究の目的と方法

本研究では，和太鼓を中心とする和楽器を使って「まつりの音楽」をつくる活動を通し，その過程において音楽の仕組みを考えながら自分の意志で音楽を作っていこうとする児童の音楽づくりへの意識の変化を検証していくことを目的とする。その方法として，児童の一連の活動での様子の変化やワークシートの記述から児童の変化を考察していく。

＊ 三条市立飯田小学校

3　実践の構想

⑴　学習指導要領における音楽づくりのとらえについて

平成20年に告示された学習指導要領では，音楽の「表現」の領域に音楽づくりについて示されている。「学習指導要領解説音楽編　第１章　２音楽科改訂の趣旨」の中に，「創作活動は，音楽をつくる楽しさを体験させる観点から，小学校では『音楽づくり』，中・高等学校では『創作』として示すようにする」とある。音楽づくりは，その楽しさを体験させることが趣旨である。その体験を通して指導する内容は，「学習指導要領解説音楽編　第２章　２音楽科の内容」に，「この項目は，児童が様々な音と新鮮な気持ちをもってかかわり音の面白さに気付いたりその響きや組合わせを楽しんだりしながら，様々な発想をもって音遊びをしたり即興的に表現したりする能力及び音を音楽へと構成していく能力を高めることについて示している」とある。子どもが音遊びの感覚で音とかかわり楽しみながら音楽をつくっていくことで，即興的に表現する力や音楽を構成していく力を育てるのだと理解することができる。これまでの学習指導要領に示されていた「音楽をつくって表現できるようにする」という内容については，「児童が自分にとって価値ある新しいものをつくりだすことを意味しており，既存の作品を表現する活動，新しい作品をつくりだす活動も含んでいた」とし，今回の学習指導要領の中では，音楽づくりについて「既存の作品を創意工夫して表現する活動は含めておらず，歌唱及び器楽の活動において指導することに留意する必要がある」としている。既存の音楽作品を創意工夫して表現する活動は音楽づくりではなく，「歌唱」「器楽」の表現領域で扱うことになった。

また，第３学年の音楽づくりの内容について，学習指導要領では「ア　いろいろな音の響きやその組合わせを楽しみ，様々な発想をもって即興的に表現すること」「イ　音を音楽に構成する過程を大切にしながら，音楽の仕組みを生かし，思いや意図をもって音楽をつくること」としている。低学年では音遊びを楽しみながら簡単な音楽をつくるが，３学年ではいろいろな音の響きやその組合わせを楽しみながらも，思いをもって音楽をつくることが大切であるということが理解できる。

⑵　本実践について

①　総合的な学習との関連から

まつりの音楽は，地域に伝わる音楽である。３年生の総合的な学習ではちょうど地域学習を進めており，「地域の『すてき』を探そう」をテーマに，児童の住む地域の特産物や伝統を探し調べる学習をしている。その学習の過程で，児童は「葎谷（もぐらだに）太鼓」が地域の伝統であることを学んでいる。「葎谷太鼓」は，地域の方々が集まり結成された和太鼓のグループで，歴史はまだ浅いが，地域の祭りやイベントを中心に活躍している。演奏される曲は，メンバーの方が創作されたものである。前年の学校行事の中のアトラクションで来ていただき，児童がその時に聞いた太鼓である。それは，数多くの大太鼓を，数十人の男性が息を合わせ打つものである。児童の心の中で「葎谷太鼓」は地域の誇りであり，憧れとなっている。そこで，和太鼓の打ち方を「葎谷太鼓」の方に教えていただくことにした。太鼓を打つことに意欲と自信をもち，触れたことのない和太鼓に対する抵抗が少なくなると考えるからだ。また，「葎谷太鼓」の方の中には，当校の保護者や地域の方もいる。その方に，学区のA地域に伝わる盆踊りの太鼓のリズムをも紹介していただく。

②　「まつりの音楽」のイメージを支える教材について

児童のイメージしている「葎谷太鼓」は，大太鼓のみを数多くそろえ，打つものである。学区のＡ地域に伝わる盆踊りの太鼓のリズムはとても細やかなリズムであり，児童が実際にその盆踊りのリズムを正確に太鼓で打つのは技術的に難しいと思われる。そこで，太鼓にはいろいろな種類があることや，太鼓以外にもまつりで使われる和楽器があること，簡単なリズムでも工夫次第で立派なまつりの音楽になることを知り，「まつりの音楽」のイメージを広げるようにしたい。そのために，いろいろな地方のまつりの音楽を集め，見たり聞いたりする活動を仕組む。児童のイメージが広がり，様々な楽器を使ったり，表現の工夫をしたりすることができると考える。

③　和太鼓を扱うことについて

花井清は，学校における望ましい器楽指導の条件には三つの内容があると述べている。①専門的な技能がなくても，容易に演奏できる，②容易には破損しない，③強い音でも弱い音でも自由に出せる，ということである。和太鼓はこれらの条件を満たしており，大人でも子どもでも自由に思い切り演奏することが可能な楽器である。いろいろな堅さのばちを使ったり，いろいろな打ち方をしたりすることにより，表現の幅も広くなると考える。

本実践で和太鼓を使った音楽づくりをすることで，低学年の学習で取り組んできたリズム表現をさらに高め，いろいろな音やリズムの組合わせを楽しみながら表現させたい。

④　学習の進め方について

和太鼓に触れたことのない児童であるので，徐々に和太鼓に慣れ，表現を楽しむために三段階に分けて学習を進めていく。まず，第一段階では，和太鼓に親しみ，慣れるための活動を大切にする。児童は，和太鼓のイメージを前年に見た「葎谷太鼓」に持っている。まず，和太鼓に自由に触れさせたり打ってみたりしながら，葎谷太鼓の方に基本となるばちの持ち方や構え方，打ち方を教えていただく。太鼓が児童にとって身近なものになり，和太鼓の学習に自信をもって取り組めるようにする。

第二段階では，実際に太鼓を打ちながら自分の好きなリズムを考えていく。児童の参考になるよう，いろいろなまつりのリズムを録音したCDを用意する。さらに，第三段階では，児童の考えたリズムをつなげ，まつりの音楽に仕上げていく。どんなつなげ方があるか，また，どんなリズムの組合わせがあるか，いろいろなまつりの音楽を録画したビデオ資料を用意し，児童のイメージを広げながら進めていく。

4　研究の実際

(1)　第一段階の様子

「まつりの音楽をつくろう」の学習に入ることを児童に話した。「『まつりの音楽』と言ったら，太鼓だよ」と話す児童に，「じゃあ，太鼓を準備して打ってみよう」と投げかけると，「本当に打つの」「難しそう」と自信のなさそうな反応が返ってきた。実際に太鼓を準備すると，おそるおそる音を出す様子だったものの，徐々にその音色に慣れ，次第に太鼓を打つことに夢中になった。大きな音を出せたことに満足している児童，鼓面と胴をたたいて音を比べている児童，両手を使って祭りの様子をイメージしながら打っている児童，とさまざまである。児童が太鼓に親しんだ後，「もっと自信をもって格好良く打てるように，今度は『葎谷太鼓』の方に来ていただこう」と投げかけた。「えっ，できるかなあ」と，また自信のない反応が返ってきた。もっと上手に打ちたいけれど，できないのではないかという，自信のなさが見てとれた。

後日，４名の葎谷太鼓の方が講師として実際に来校した。葎谷地区に伝わるものでなく，学区であるA地区に伝わる盆踊りのリズムを打つことを講師から伝えられ，実際に打つことになった。

資料１　Ａ地区の盆踊りのリズム

かんからかっち　かっか
かんからかっち　かっか
かんからかっち　かんからかっち
かんからかっち　かっか

かんからかっち　かっか
かんからかっち　かっか
かんからかっち　かんからかっち
かんからかっち　かっ
かかか
ドドドンドンドン
かかか
ドドドンドンドン
かかか
ドドドンドンドン

Ａ地区の盆踊りの太鼓は，打つ際は鼓面をほとんど打たない。体の向きは鼓面に正対せず，横向きになるように立つ。そして，冒頭のリズムからほとんど胴の部分を打ちながら進んでいく。

胴の部分を打つと，「かっ，かっ」という音が響く。その音とリズムを正確に伝えるため，「かんからかっち・・」に始まる言葉が地区に伝承されている。言葉のリズムを覚え，講師が打つ太鼓のリズムを見て，児童は盆踊りのリズムを少しずつ覚え，打てるようになっていった。ほぼ全員がリズムを合わせて盆踊りのリズムを打てるようになり，児童は太鼓を打つことに自信をつけることができた。ただ，児童の様子を見ていると太鼓を打つことが楽しそうではあるが，教わったリズムを正確に打つことのみに集中していた。子どもの感想には，「楽しかった」「がんばった」という感想がほとんどであり，「次はこうしたい」という表現への意欲までは感じられなかった。

〔児童の作文から〕
・たいこをうててよかったです。うったら，ぼくはたいこがすきになりました。また，うってみたいです。
・たいこの白いところをうったら，とても音が大きくてびっくりしました。黒っぽい丸いところをうったら，ひくい音だとはじめて知りました。

(1)　第二段階の様子

太鼓を実際に打ちながら，自分が打ちたいリズムを見つける活動にした。すでに太鼓に打ち慣れ，すぐにリズムが決まる児童もいれば，ずっと考え込んでいる児童もいる。そこで，リズムの例を挙げることにした。

①　「まつりの音楽」のCD

和太鼓のリズムがはっきりと聞き取れるCDを用意した。葎谷太鼓と，味方穀倉太鼓である。簡単なリズムで聞き取りやすいものを選んだ。リズムは簡単であっても，音を重ねたり，違うリズムを組み合わせたりすることで表現に変化が生まれることを感じることができた。

② リズムパターンの提示

複雑なリズムを考えている児童ほど，どんなリズムにしたらよいか分からなくなっていることから，実際に，教師が簡単なリズムを打ってみせ，児童は即興でリズムをまねながら，全員で同じリズムを打ってみた。以下のようなリズムである。児童には，耳からリズムを感じ取ってまねて打つようにした。

・どん　どん　どん　どん
・どどどどどどどど｜どどどどどどどど｜
・どん　どど｜どん　どど｜

その他，できるだけ簡単なリズムを全員で打った。低学年で学習してきており，児童が即興で教師のリズムをまねて打てるものばかりである。簡単なリズムであっても，大勢の人数でリズムを合わせて打つと和太鼓の迫力がずしりと増す。児童は自信をもち，「すごい」「打てた」と大喜びであった。

③ 言葉からリズムを作る方法の提示

第一段階の指導で，児童は言葉とリズムが連動していることを学んだ。その学びを生かし，言葉からリズムを作る方法もあるのではないかと児童に問いかけた。「しんごうき，しんごうき」という言葉の繰り返しからは，「どどどど　どん」というリズムが生まれる。「あそぼう」「〇〇さん」等，児童は好きな言葉を言いながら太鼓を打ち，リズムにしていた。言葉のアクセントを太鼓の鼓面と胴で打ち分けたり，片手打ちと両手打ちで打ち分けたりする姿も見られた。

以上の方法から，学級全員の児童が自分の打ちたいリズムを見つけることができた。そのリズムは，忘れないように言葉に表して書き記すこととした。

第一段階の指導で，太鼓の胴打ちを学んだ経験から，児童が作ったリズムは胴打ちと鼓面を打ち分けるリズムがとても多かった。また，胴打ちの音を「かっ」と表す子がほとんどであり，第一段階での学習が生きていた。地区に伝承されてきている盆踊りのリズムも，胴打ちは「かっ」，鼓面は「ドン」と表現されている。そして，リズムは繰り返して演奏するように子どもが「×３（３回繰り返す）」「×５（５回繰り返す）」と指定して表現しているものが目立った。葎谷太鼓の講師に教わったことを基本にしながら，児童が自分のリズムを大切にし，工夫しながら作ったことが見てとれた。

〔児童の作文から〕
・わたしは，今日の勉強で「ドン・ドン・カ」をもっとふやして，６回にしたいなあと思いました。たくさんくりかえしたほうが，もりあがるかんじがするからです。
・自分の思い通りのリズムができました。よかったです。

(3) 第三段階の様子

児童が作ったリズムを「まつりの音楽」に仕上げる前に，いろいろな「まつりの音楽」を児童に見せたり，聞かせたりした。児童の持つ「まつりの音楽」のイメージを広げることをねらった。

① 葎谷太鼓の演奏を撮影したビデオ

地域の祭りに出演していた，葎谷太鼓のビデオを見せた。全て和太鼓の構成である。簡単なリズムが繰り返され，最初は一人が演奏していたものが，リズムが繰り返されるうちに徐々に２人，３人と同じリズムが折り重なっていく。リズム自体が簡単だからこそ，和太鼓の音色の重なりが増えるにつれ，ずっしりとした迫力が増す。児童は，ビデオを見ながら同じリズムを打ってみたり，「これはできそう」と言ったりしていた。

② 上越祭りの様子を撮影したビデオ

上越祭り（上越市直江津地域の祭り）の様子を撮影したビデオを見せた。ビデオでは，各町内の屋台が太鼓や笛の音色に合わせて行進している。何時間も演奏しながら行進するため，太鼓を打ったり笛を吹いたりするビデオの中の子どもたちは，時々休みながら，肩の力をぬいて楽しそうに演奏していた。どこの町内でも，和太鼓は２台，笛が数人～10人くらい，鉦一人という構成である。和太鼓の迫力だけでなく，笛が入ることで流れるような旋律が加わり，さらに鉦が入ることで音に華やかさが加わる。児童は，自分たちと同じ年くらいの子どもが太鼓を打ったり笛を吹いたりする様子を食い入るように見ていた。学校の音楽室にもある楽器「鉦」を見つけ，「見たことある！」と話す姿が見られた。

写真１　上越祭りの様子

また，このビデオを見せた際に，各町内に伝わるこのまつりの音楽の楽譜を児童に見せた。この楽譜は五線譜ではない。太鼓のリズムは黒丸と白丸で示され，打ち手は黒丸の部分を打つ。白丸は休符の役割をしている。音の大小は黒丸の大小で示されている。「ド～コドン」と横にかたかなで書かれているが，見た感じではリズムが理解しにくい。児童は「意味が分からない。」と言いながら，ビデオに流れるリズムと楽譜を見比べていた。そして，「楽譜を見るより，ビデオを見ながら打つほうが打てそう。」と，ビデオを見ながら打つまねをしていた。「今まで使っていた五線譜の楽譜と比べてどうかな。」と投げかけると，「今まで使っていた楽譜のほうが分かりやすい。」と返ってきた。

③　自分のリズムを作り，友達とつなげる活動

「まつりの音楽」のイメージが少しずつ広がってきたので，グループを作り，お互いのリズムを示し合った。リズムは全て言葉で書かれている。児童は自分で作ったリズムが理解できても，友達が作ったリズムは読んでも理解できなかった。何度も自分のリズムを打ってみせながら，友達の作ったリズムをとらえようとがんばっている児童が多かった。実際に打ちながら，「〇〇さんのリズムを最初にしたほうがいい。盛り上がる感じにしようよ」「このリズムはもっとたくさん繰り返そうよ」と話し合いながら友達と自分のリズムをつなげていった。つなげ方は，「一人ずつ自分のリズムを打って交代しながらつなげていくグループ」，「グループ全員で全てのメンバーのリズムをみんなが打つグループ」に分かれた。一人ずつ自分のリズムを打って交代していく方法は，一番児童には易しい方法である。自信をもって打つことができる。しかし，一人ずつ打つので，太鼓の音は1台だけとなり，迫力には欠ける。グループ全員で，全てのメンバーのリズムを打つ方法は，複数の人数が同じリズムを同時に打つので，とても迫力がある。だが，児童は，自分の作ったリズムだけでなく，自分以外の全てのメンバーのリズムを覚えて打たなければならない。児童にとって，即興ではできない，難しい作業である。一人ずつ打っているグループには，打つ速さを変化させてみたり，間をとってみたりする工夫の仕方があることを助言した。また，グループ全員で全員のリズムを打つグループは，打てる児童と打てない児童に分かれてしまっていた。そこで，全員が同じリズムを打たなくてもよいこと，簡単なリズムを重ねていく方法もあることを助言した。グループでの練習を十分に積んだところで，発表し合った。グループごとにいろいろな工夫があったことを聞き合うことができた。

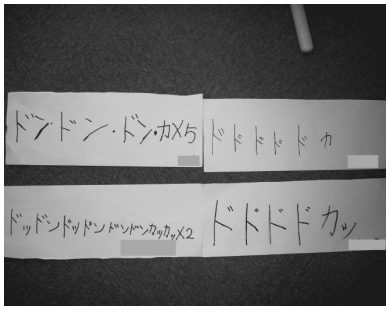


写真２　考えてつなげたリズム

〔児童の作文より〕
・〇〇さんのリズムがとてもむずかしかったです。でも，うてて楽しかったです。
・たいこだけでなく，せんりつがあるともっといいと思いました。
・たいこのべん強は，いっぱい考えたことがありました。自分が考えたリズムができて，よかったです。

グループみんなで一つの小さな曲ができたことが楽しかった様子で，「次はクラスみんなでリズムをつなげてみたい」「旋律をつけたい」「みんなで曲を作って，音楽会で発表したい」と，次々に声があがった。「もっと表現したい」という児童の気持ちの高まりが感じられた。

④　リズムをつなげて，１つの曲にする活動

そこで，みんなでリズムをつなげ，１つの曲にすることにした。「ぼくたちの曲を作るんだよ」と言いながら，「最初は静かに，だんだん盛り上がる感じにしたい」「まつりなんだから，かけ声で始めよう」とどんどん児童から意見があがった。かけ声で始まり，まつりの始まりにふさわしいように，盛り上がるリズムが続く。その次のリズムのつなぎには華やかさと変化を持たせるために鉦を打つ。また，「教えてもらった，Ａ地区のリズムを入れたい」「盆踊りのリズムだから，まつりに使うんだよ」と，途中でＡ地区の盆踊りのリズムを入れることになった。その際，立ち位置が胴に向く。「立ち位置を変える」ということで，音だけでなく，見た目の動きを変える工夫があることを発見した。「ばち同士を打って，クロスしてポーズしよう」と，曲を終わるポーズも決めた。

写真３　かがやき太鼓の発表

作った曲は「かがやき太鼓」と名付け，学習参観の日に発表した。全員の保護者が駆けつけ，また，葎谷太鼓の方も駆けつけ，子どもたちの「かがやき太鼓」に拍手を送った。また，そのときの演奏を録音し，CDにして配布した。子どもたちは「おばあちゃんが何回も聞いていたよ」「楽しかった。もう１回やりたくなった」と大喜びであった。

〔児童の作文より〕
・ たいこの勉強はとても楽しかったです。また，打ちたいです。
・ぼくは音楽は好きじゃなかったけど，たいこの勉強は楽しかったです。たいこを打てて，楽しかったです。

5　研究の考察

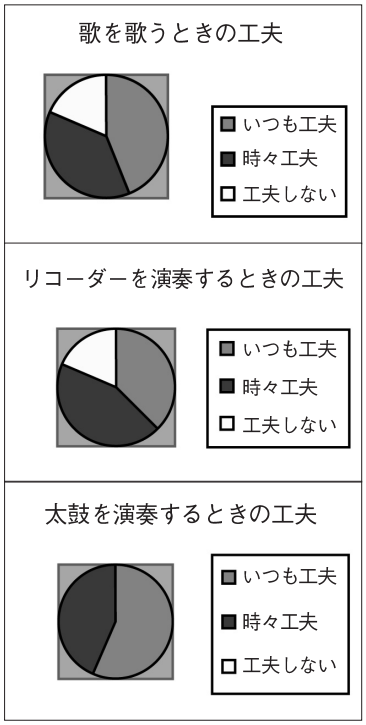
(1)　学習の成果

音楽の学習を振り返り，児童は自己評価を行った。「歌を歌うときの演奏の工夫」「リコーダーを演奏するときの工夫」「太鼓を打ったときの工夫」についてである。「まつりの音楽をつくろう」の学習の間，太鼓ばかりをしていたわけでなく，歌やリコーダーの学習も並行して行っていた。自己評価の結果，歌やリコーダーの学習では，ほぼ変化がなく，半数近くが「いつも工夫する」「時々工夫する」と回答し，何人かは「工夫しない」と答えた。一方で，太鼓の学習は全員が「いつも工夫する」「時々工夫する」と回答した。

本実践の「まつりの音楽をつくろう」は，児童が自分で音楽をつくる活動であり，工夫しなければ成立しない学習である。既存の音楽作品を取り上げる歌やリコーダーの学習と比べれば，このような結果になるのは当然であるが，受け身になりがちだった音楽の時間に児童が「私はこうしたい」と自分の表現したいことを明確に表し，また，自分の表現したいことを表現する楽しさを実感を伴って経験できたことは大きな収穫であった。

また，本実践後，児童が音そのものにきちんと耳を傾けるようになった。友達の声をよく聞いたり，伴奏をよく聞いて歌い出しをきれいに揃えたりすることができるようになった。何となく演奏したり聞いたりするのではなく，児童自身が意志をもって「聞こう」「がんばって練習しよう」「演奏しよう」としている様子が見られた。また，感じ取ったことを言葉で表したり，リズムの繰り返しに気付いたりと音楽の仕組みを感じて聞き取る力が育ち，音楽全般の学習への姿勢に変化があったことを感じている。

資料２　児童の自己評価



(2)　今後の課題

本実践を通して，児童は，「自分たちが曲を作ったのと同じように，いろいろな曲には作った人の思いがこもっている」ということを学んだ。音符や音楽記号の裏側に，作曲家の表現したい音楽があることを理解することができた。だが，やはりリコーダーの運指や音符の読みでつまずき，表現を工夫しようという意欲を失ってしまう児童が依然としている。児童の表現意欲を大切にしながらも，運指や音符の読みがスムーズにできるよう，表現するための基礎基本を粘り強く指導していく必要がある。

「音楽づくり」の活動は，ただ音楽をつくればよいのではない。指導事項として何をどのようにつくっていくのか，示されているものを大切にしなければならない。低学年から高学年へと計画的に指導すること，使用する楽器等の系統を探究すること，こうしたことを積み重ねることで児童の変容を着実に促していく工夫が必要だと考える。

引用文献，参考文献

花井　清　「和太鼓が楽しくなる本」財団法人浅野太鼓研究所，2001年，P67
福井昭史　「よくわかる日本音楽基礎講座」音楽之友社，2006年
山本　弘　「ふしづくりで決まる音楽能力の基礎・基本」明治図書，2005年
「直江津祇園囃子」直江津祇園祭協賛会祇園囃子伝承研究部会，平成18年
「小学校学習指導要領」文部科学省，平成20年
「小学校学習指導要領解説音楽編」文部科学省，平成20年